ラボエームについて

＜基礎知識＞

プッチーニが人気オペラ作曲家になった成功作。家がまずしかったプッチーニは奨学金をもらいながら音楽の勉強をつづけていたが、苦学をつづけていた。（カヴァレリアの作曲家のマスカーニと一緒に下宿していた）そのときの体験も生かしながら、フランスの作家ミュルジェールの「ボヘミアンたちの生活情景」という短編小説を台本化し、オペラにしたものが「ラ・ボエーム」である。内容は TV ドラマのような「センチメンタルな青春オペラ」で、その詩情ゆたかで写実的、各人物の個性的な描き方、色彩的な管弦楽、優れた舞台効果など、「ラ・ボエーム」がプッチーニの全作品中最高傑作であるとする人も多い。ドビュッシーも「あの時代のパリをあんなによく描いたオペラはない」と賛辞をあたえている。

＜登場人物＞

ミミ（ソプラノ）　まずしいお針子
ムゼッタ（ソプラノ）　自由奔放にいきる女性
ロドルフォ（テナー）　詩人
マルチェッロ（バリトン）画家
ショナール（バリトン）　音楽家
コルリーネ（バス）　哲学者
ブノア（バス）　家主
アルチンドロ（バス）　高官
その他　パルピニョールおもちゃ売り、役人、警官、夜警

＜舞台＞　1830 年ころのパリ（のある１年間弱）

＜第一幕＞

ロドルフォ他の４人の若い仲間たちは、まずしいながらも楽しい生活をおくっていた。家賃も滞納しているが、その家主をうまくおいかえてしまう。今日はたまたまショナールが金もうけをしてきたので、クリスマスイブに皆で外食をしようとする。ロドルフォは仕事があるからと残るが、そこへ隣に住むミミがたずねてくる。ミミもまずしくどうも病気らしい。ミミとロドルフォはたちまち恋におちる。（「冷たい手」「私の名はミミ」という有名なアリア）２人は仲間たちを食事をするために部屋をでていく

＜第二幕＞

パリの街は大変な賑わいである。カフェモニュスに席をとる４人＋ミミ。そこへあらわ

れるのは、金持ちの高官をつれたムゼッタである。ムゼッタはマルチェッロとつきあっていたが２人はけんか別れをしていた。実は今でも気になる２人はお互いに関心がないふりをしている。ムゼッタは人目をひくように「私が町をあるくと」のアリアを歌う。ムゼッタは「突然足が痛い。新しい靴を買ってきて」と高官に言う。店をでていく高官。４人の若者＋ミミ＋仲直りをしたムゼッタ　は勘定書きを高官に残して雑踏の中にまぎれて店をでていく。帰ってきた高官は一人残され高い勘定書きにびっくりする。

＜第三幕＞

第二幕の数ヵ月後、ミミはマルチェッロをたずねてくる。あの日以来ミミはロドルフォと一緒に生活をしているのだが、「最近ロドルフォが冷たい」とマルチェッロに言う。店からロドルフォがでてくる。ミミは隠れてロドルフォとマルチェッロの話を立ち聞きしている。「ミミは浮気者」とロドルフォが言うがマルチェッロはロドルフォの言うことを疑う。「実はミミはひどい病気なんだ。自分にはミミを直すことはできない」とロドルフォは本当の気持ちを言う。陰で咳き込むミミにロドルフォは立ち聞きされていたことに気づく。マルチェッロが店に入ると２人きりになるミミとロドルフォ。「恨みっこなしでわかれましょう」と歌う２人、店の中ではののしりあうマルチェッロとムゼッタ。全体を雪がつつむ。情感あふれる場が終わる。

＜第４幕＞

それから数ヶ月後、また４人は元の暮らしをしている。ロドルフォもマルチェッロも恋人のことを思うと仕事が手につかない。皆がふざけているところにムゼッタがミミを連れてくる。ムゼッタは、貴族の旦那のところにいたミミがロドルフォのそばで死にたい、といわれてここへつれてきたという。ミミは誰の目にも今にも死にそうなことがわかる。ロドルフォとミミに皆は気を使っていろいろな用事をみつけて外で出て行く。思い出をかたる 2 人、やがて皆が帰ってくる。ムゼッタの手袋によろこぶミミ。ロドルフォが窓に覆いをしているうちにミミは死んでしまう。皆の様子がおかしいことに気づくロドルフォ。一同涙のうちに幕となる。